

豊明希望チャペル礼拝

2025/6/1

「私の名を運ぶ者」

使徒の働き 9 : 1～19



イスラエルの北、シリアのダマスカスというところに、二つの教会があります。一つは、聖パウロ教会、もう一つは、聖アナニヤ教会です。いずれも、人の名前ですね。今日の使徒の働きの箇所では、この二人に焦点を当てて、報告しております。

この二人の関係は、敵同士でした。サウロとも呼ばれるパウロは、熱心なユダヤ教教徒として、当時、クリスチャンを



捕まえ、牢に入れることを使命として、クリスチャンを迫害し、追いかけておりました。一方、アナニヤは、そのパウロに命をねらわれていた人で、しかし最後には、そのパウロを、キリストのその救いに導いた人であります。

パウロは、今のトルコ(この地図では、迂回して左方向のトルコ)のタルソスというところの生まれであります。一方、アナニヤは、この地図では、イスラエルの北、シリアのダマスコ (現：ダマスカス)の在住のクリスチャン(弟子)でした。

今は、敵同士だった二人が、教会の名前となって、同じ町に揃って立っているのです。

パウロについては、使徒の働きでは、その人となりや、イエス様との出会いについては、ここだけでなく、22章と26章にも触れられています。アナニヤの記事は、ここだけです。特にアナニヤに詳しく注目したいと思います。

1節から19節までの比較的長い箇所ですので、今日の箇所を簡単にまずお話しします

先にも触れたように、当時、パウロ(ローマ名：パウロ、ユダヤ名：サウロ)は、以前「8:3 サウロは家から家に押し入って、教会を荒らし、男も女も引きずり出し

て、牢に入れた。」私たちクリスチャンから見ると、きわめて凶暴な人間、クリスチャンの敵でした。

彼は、エルサレムでの迫害でその手を休めることなく、ステパノの出来事をきっかけに、国外の逃げているクリスチャンを追いかけ、牢にいれ、裁判に掛けて、あるいはステパノのように処刑する許可をもらって、イスラエルの北シリアのダマスコに、恐らく神殿の警備の兵隊を何人も連れて、1週間の道のりを旅します(:1~:3)。ところが、目の前にダマスコが見えたぞというときになって、まるでカメラのフラッシュがたかれたような強い光が光って、彼を照らします。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞きます。「どなたですか。」とパウロが聞くと、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」同行の兵士らたちにも、たしかに何か声のようなものは聞こえるのですが、何も見えませんでした。そして、その主の言葉は、「ダマスコに行け」ということでした。パウロはその強い光によって、見えなくなっていましたから、彼らは、手を引いて、パウロを、ダマスコに連れて行きました。一方、ダマスコのアナニヤには、町のユーセイアン通り（「真っ直ぐ」）のユダの家に、ユダヤ名サウロという人間を訪ねよと、主(イエス様)は、彼に命じられました。彼は、あなたに手を置いて祈ってもらうために、そこで祈っていますと。(:10~12)

しかし、アナニヤは、サウロという名前を聞いて、背筋が凍るような思いがしたでしょう。すでに彼は、サウロという人間が、エルサレムでクリスチャンにどういことをしたか、そして、今許可をもらって、こっちに向かっている、彼のまわりのダマスコにいるクリスチャン(もしかしたら彼自身も)は、エルサレムから逃げてきたクリスチャンです。「ここまで追ってくるのか」と、覚悟を決めていたかもしれせん。絶望的な覚悟をです。

主の声が聞こえた。そのサウロが、もうこのダマスコに入っているという。そして、なぜか、この私に祈ってもらうために待っているという。彼は戸惑いました。そして、恐れたのではないのでしょうか。いったいどういうことだろうと。

彼の言葉を読みます。「**9:13 しかし、アナニヤは答えた。「主よ。私は多くの人たちから、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。9:14 彼はここでも、あなたの名を呼ぶ者たちをみな捕縛(ほばく)する権限を、祭司長たちから与えられています。」**」



私たちは、ここで、一つの小さな疑問をもちます。それは、なぜ、このアナニヤが選ばれたのだろうかということです。なぜペテロでなく、なぜヨハネでないのか。彼がどういう人物であるか、ここに突然出てくる人物で、彼については、よくわからないのです。ただ、唯一わたしたちが知る事

は、彼がサウルによって命をねらわれたダマスコのクリスチャンであるということです。神さまは、アナニヤに、彼の命をねらう敵を愛し、彼の役に立つことをすることを求められたのです。すなわち、パウロの目を癒し、パウロをイエス・キリストの救いを伝え、彼が神の使命に新しく応えて生きるように導いたということです。



南アメリカのエクアドルに宣教に遣わされ、エクアドルの現地人の人によって、殺された 5 人の宣教師についてです。今から 70 年ほど前の話です。今から 25 年ほど前に、この中のお一人(写真の真ん中: ジム・エリオット)の、残されたエリオット夫人から、直接にある集会(2000 年沖縄「日本宣教会議」)で、お話を聞いたのです。その話しは、凄まじい体験の証言であり、夫人エリザベス・エリオット宣教師の、驚くべき証しでした。

その話しは、1956 年 1 月にさかのぼります。アメリカ人の 5 人の宣教師がエクアドルのジャングルで消息を絶ったというニュースでした。やがて、捜索隊が、残念ながら、原住民に惨殺された 5 人の宣教師の遺体をみつけます。そして、その一人は、このエリザベス夫人の夫、ジム・エリオット宣教師でした。

講壇に立った夫人は、こう証しされました。夫が殺された後、夫人が、なんと夫の後を継いで、エクアドルのそのジャングルに宣教師として遣わされることを願った

のです。先生は、こう語られます。



「私は一人娘を連れて行きました。」そして・・・「夫を殺した 5 人の現地の人とも友達になりました。」私は、にわかには、その状況が飲めない感じがしました。しかし、夫人は続けます。「その現地の人からヤリをプレゼントされて、今でも家

に飾ってあるんですよ。」と、ニコニコしながら語るのです。夫人が、現地の人たちの民謡を我々の前で上手に歌ってみせるに至っては、私は、驚きを超えて、信じられないという思いを抱きました。

先生は、夫が殺された後、はじめてその村に入った時の事を語ります。

彼女は、彼らから、その時、夫を殺した時の様子を克明に聞きとりテープにおさめたのです。聞きたくはないけれど、しかし、どうしても聞かなければならない、他の宣教師たちの親族も聞かねばならない話でした。ヤリをもってゆつくりと殺されていくその証言はしかし、耐え難いものでした。

そして、その後の、現地での彼女の宣教について証をされました。皆さんがおそらく思うでしょう、私のような女性が、どうして、再び、命が助かって、今も長らえているかを、こう話します。実は、殺された 5 人の宣教師は銃を持っていたにもかかわらず、「その緩慢（かんまん）な、そして残酷な出来事の中で無抵抗を貫いたこと。」それによって、実は、彼らは、結果的に彼ら宣教師たちが自分達の敵ではないことを殺した後に気づいたというのです。そして、それは少なからず彼らの心を打ったのです。そして、先生は知ります。彼らはその後、悔やみ、悩み苦しんでいたということをです。再び、夫たちを殺した、彼らに、しかし先生は、キリストの犠牲と赦しと贖いを伝えます。結果・・・ついに、彼らもクリスチャンになるのです。そして最後には、彼らは他の人に福音を宣べ伝えるようにまでなったというのです。

その話は、たしかに、自分の命をねらう、そこに遣わす神様からの使命そのものでありました。それは、ちょうど、神さまが、アナニヤを選んだようにでありました。神さまは、夫を殺した人たちのところに、なんと・・・彼女に行けと使命を与えられたのです。

アナニヤの記事に帰ります。アナニヤの恐れ、尻込みに対して、主は、このように言われました。

「9:15 しかし、主はアナニヤに言われた。「行きなさい。あの人わたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

彼にいい思いをさせるためではない、彼を苦しめるために私は彼を選ぶ。面白い言い方ですね。たしかに、彼は、この後の人生、今まで自分がやってきたことを自分の身に負うことになります。彼は前にステパノを石でうち、後には自分が石で打たれる使命を担ったのです。クリスチャンを殺そうとしましたが、こんどは彼が、ユダヤ人に殺されそうになります。前には彼は、クリスチャンを牢獄に入れましたが、自分が牢獄に入れられるためにであります。多くの人々を苦しめましたが、今度は彼自身が幾たびもムチで打たれるために、彼は召されるというのです。

そのようにして、罪人の為に死なれ、その罪人を赦し、新しい永遠の命を与えて下さった方の、その苦しみと勝利の証人になるためであります。

あのエリオット・エリザベス宣教師は、夫が殺される様子を克明に聞きながら、自分がその時思ったのは、イエス・キリストのことだと語るのです。父なる神は、一人息子のイエス様を見ていたはずだと。子を失うことを知る神が、私の夫をはじ

め、神の福音を伝える伝道者たちが殺されるのをどんな思いで見teおられたのだろうか、その事ばかりを考えていたと。きっと大きな同情と、励ましをもって、そばに寄り添い、心をいため、涙をながし、見ていて下さったはずだと。

先のことば、「彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」とは、不思議な言葉です。

アナニヤにとって、不思議ではありました、あるいは、解せない、理解出来ないとしても、彼は、即座に出かけました。

「9:17 そこでアナニヤは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中であなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」

私の命をねらうサウロに彼がかけた第一声は、こうであったと、使徒の働きの著者ルカは、こう正確に語ります。

「兄弟サウロ。」あなたは、私の「兄弟サウロ」だと！声をかけるのです。

私は、エリザベスさんの話を聞いて、彼女の、夫を殺した、現地の人たちを愛し慈しむ言葉を聞いて不思議に思いました。しかし、それは、確かに、神さまの彼らを愛せと命じられた夫人の、信仰と、その決断の結果のことば、決断なのだと理解したのです。パウロ(サウロ)が、後に、彼の手紙ローマ人の手紙で、私は、自分の限界を知り、しかしそれでもこの罪人を赦して下さり導いて下さる、私を愛し、私の人生を責任をもって導いて下さる方に、自分を任せようと思った。(ローマ8:1)と語ります。

もしかしたら、その思いは、このアナニヤの「私の兄弟サウロ」と声かけてくれた、その彼の思い、その愛とその使命を引き継ぐものであったのかもしれませんが。

さて、ここまで見て、教えられてきました。

今朝、私たちも、神様からそのように、赦され愛されいる、その事実に関心を開きたいと思います。

あるいは、私たちの歩みが、苦しみが続く現実のただ中でさえ、それは、もしかしたら、自分が引き起こした、私が招いた現実かも知れない、しかしそれでも、その憎まれるべき罪人の神さまに選ばれたこと、そこに深く気づき、そこに生きる、今週の歩みとしたいと思うのです。

また、私たちの隣人に対して、あなたも神に愛されている、選ばれている、「兄弟よ」と呼びかけるように、神の、キリストの福音をお伝えしていけるように願い、今週も歩みたいと思うのです。祈りましょう。